〔C-AMP, C-GMP の変動〕

前述のごとく高濃度の isoproterenol 使用中と使用していないときとで，リンパ球・好中球の C-AMP, C-GMP の反応を調べた結果は表1，表2のごとくで，症例1では isoproterenol 使用中はまだ isoproterenol に対して dose response 的反応がみられているが，症例2の場合 isoproterenol 32μg/kg/min 使用時のリンパ球の反応はほとんどみられず，使用後23日目でも十分な回復がみられていなかった。

この結果は好中球にも同じような結果で，リンパ球同様にきわめて大量 isoproterenol を用いた場合は反応が悪かった。

結局，薬剤に tachyphylaxis は isoproterenol の場合比較的早くおこり，臨床効果を本剤のみで期待する考えは副作用面の問題を考慮すると危険な場合もあるといえる。

心理テストの数量化の試み

埼玉医科大学小児科　赤坂　徹
鈴木五男
三ツ林隆志
丸木和子
前田和一
中山喜弘
埼玉医科大学精神科　根津　進

気管支喘息と心理的問題については，発症や誘発因子，悪化因子として多くの研究がなされてきた。用いられた検査法は，臨床医にとってなじみが薄いものであったり，判定には客観性が乏しく，結果の表現形式も記述式が多く，経過を追って比較したり，集団の傾向を把握するのが困難だった。そこで共同研究者で心理鑑定員の根津の協力を得て，喘息サマースクールに参加した喘息児について，昭和53年から3年間心理検査を実施した結果数量化され，興味のある成績を得たので報告する。

〔方　法〕

埼玉医科大学小児科アレルギー外来主催の喘息サマースクールに昭和53年から3年間に参加した延84名の気管支喘息患児を対象として次の心理検査を実施した(表1)。

(1)　田研式親子関係診断テスト

喘息児からみた父母と父母からみた喘息児との両側からのテストを完了した65名についてまとめた。喘息児からみた父母との関係は（図1）のように昭和54年と55年を比較すると，準危険地帯と危険地帯を占める比率が低下の傾向にあった。特に積極的拒否，消極的拒否，不一致，厳格，溺愛型が多く，危険，準危険地帯がないような，いわゆる検査上正常な親子関係にある家族がやや増

表1　気管支喘息児の総合的療育のモデルとしての夏季合宿活動(サマースクール)3年間の経験

		昭和53年	54年	55年	計
軽　症	男	8	6	12	26
	女	2	0	3	5
	計	10	6	15	31
中等症	男	10	18	12	40
	女	0	8	3	11
	計	10	26	15	51
重　症	男	3	0	5	8
	女	3	0	2	5
	計	6	0	7	13
総　計		26	32	37	95 {男74 女21}

（埼玉医大小児科）

（重症度分類は小児アレルギー研究班によった）

加した。同様の傾向を父母からみた喘息児との関係にも存在した（図２）。これらの結果で，父母間に大きな違いは認められなかったが，母親にいわゆる正常者が少ない傾向にあった。

(2) Rosenzweig Picture Frustration Study（以下 PF Study と略）

PF Study はフラストレーション場面における対応の様子を文章で記入するもので，作為的な影響が少ないとされている。三京房版児童用を使用し，住田らの行った標準化されたものと比較し，M（平均）と σ（標準偏差）をもとに，Z-score を算出し，±1.75 以上を問題ありとした。なお M±1.75σ に含まれる範囲は 91.98 %だった。集計し整理する項目が27項目あり，転移分析の５項目を除く22項目に M と σ を算出した。２年間の累計では，問題なしは４名（８%），問題ありは46名（92 %）で喘息児はフラストレーション場面での反応のパターンに問題が多く，特に障害強調（E′）では，フラストレーション場面での不平，不満，愚痴の出し方が過剰で打ちのめされるもの３名，不平や愚痴で問題が解消できないものが８名あった。解決依存（e）の過多は，依存性，愛情欲求の指標であり，欠損家庭によくみられるが，両親がそろっていても，愛情不足や親の拒否型の反映とも考えられるものが５名と，過少で，充足されているか，期待できない絶望の場合が６名にあった。外罰（ΣE）は攻撃を外に向けるもので，過多が３名に対し，外に向けることができず，我慢するといった過少が７名だった。責任回避（I）は自己弁護や弁解がましさをあらわし，過多の７名は本質的には自分の非を認めようとせず，過少の３名は，自ら守ることができないと考えられる。集

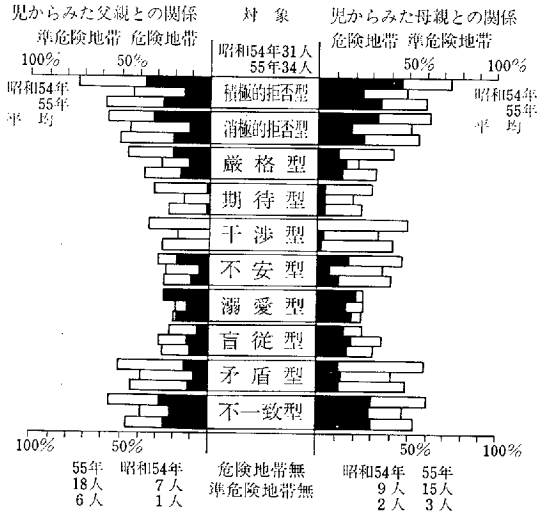

図１ ぜんそくサマースクール参加児の田研式親子関係診断テスト

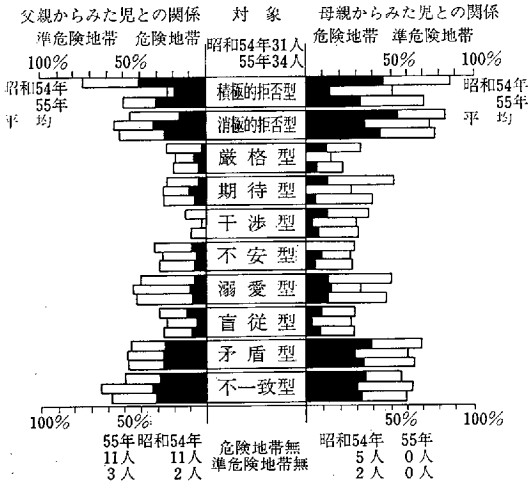

図２ ぜんそくサマースクール参加児の田研式親子関係診断テスト

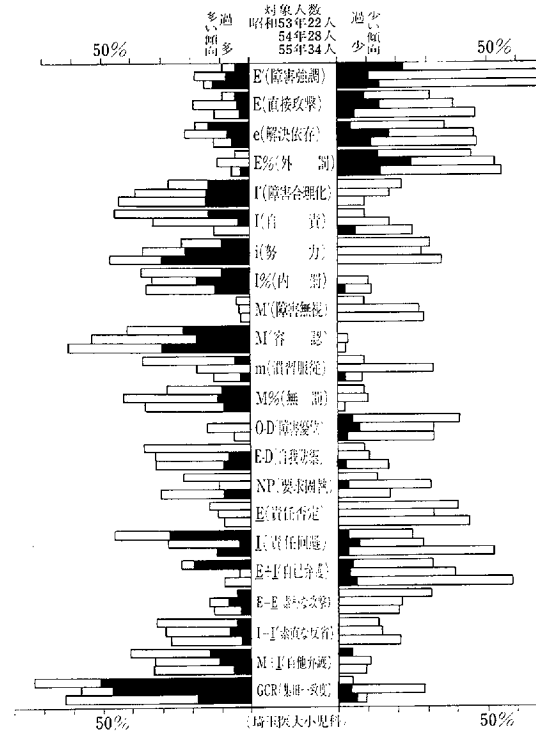

図３ ぜんそくサマースクール参加児の Picture Frustration Study の異常率の推移

団一致度（GCR）はフラストレーション場面での常識的な適応を表わし，過多は24名と圧倒的に多く，これは常識的な適応をしすぎて，自己主張をおさえてしまう抑圧型とみられる。常識的な適応ができないとする過少はわずか1名だった。

重症度との差は，症例にかたよりがあったためか確かめられなかったが，3年間の結果を比較すると（図3），過多を認めた項目では，努力（i），容認（M）がやや増加し，集団一致度（GCR），責任回避（I），慣習服従（m），自責（I）が減少の傾向をみた。過少を認めた項目は依然として，障害強調（E′），直接攻撃（E），解決依存（e），外罰（E%），自己弁護（E+I）であり，大きな変動を認めなかった。

〔考　察〕

以上の2種類の検査を実施して，集団としての傾向と年次的変動について検討した。心理学用語と記載の方法には，まだまだ理解が困難であるが，気管支喘息児とその家族の心理的背景を知り，日常生活の指導に応用できると考える。すなわちこれらの検査には，親子関係テストのように作為的に記入されていたとしても，父母からみた喘息児との関係と同時に喘息児から父母をみたものと比較することにより，両者間のへだたりを発見したり，作為の可能性を知ることもできる。PF Study については，今後追跡調査する必要があると思われるが，記入している時点での健康状態心理状態に影響される部分があり，メサコリン吸入試験等による気道の過敏性検査に対し，心理的な過敏状態を反映するものではないかと推定される。

〔まとめ〕

喘息サマースクールに参加した延84名の喘息児について，田研式親子関係診断テストと Picture Frustration Study を施行し，全体的な心理的特徴と年次的変動について検討した。

〔参考文献〕

- 吉田勝美，他：ローゼンツアイク PF スタディ使用手引，三京房，京都，1963.
- 厚生省心身障害研究「小児気管支喘息」班：気管支喘息児の日常管理のための指針，1978年版，1979年版
- 赤坂　徹，他：喘息児夏季合宿（サマースクール）の再評価——心理的特徴と呼吸機能検査の応用——小児科臨床，34：105～115，1981.

小児気管支喘息における食餌アレルギーの臨床と予後

同愛記念病院小児科　馬　場　　実
向　山　徳　子
岩　崎　栄　作

アレルギー疾患の代表である気管支喘息においては吸入性抗原が重要な意義を持つことが多いが，小児期の気管支喘息，特に乳幼児では食餌性抗原の占める役割は重要である。小児における食餌アレルギーの特徴としては食餌性抗原による皮膚反応が陰性である場合が多く，診断的価値が低いこと，多種多様の症状を示し症状は年令により差がみられること，自然治癒（natural outgrow）がみられることなどである。今回われわれは気管支喘息小児において，その生活指導の一つとして，食餌アレルギーの関与する症例につき臨床的に検討を加え，また特異抗原の除去により臨床症状や血清 IgE 値，RAST 値などがどのように変化するか検討したので報告する。

対象は同愛記念病院小児科受診中の気管支喘息小児で食餌アレルギーを確認しえた100例（男児73例，女児27例）で男女比は 2.7：1，年令は 0～18才である。食餌アレルギーの診断は問診，食餌誘発試験，アレルギー皮膚試験，RAST 法にもとづき行った。

確認しえた食餌性抗原は卵61例，牛乳40例，そば10例，大豆8例，チョコレート2例，ピーナッツ2例，チーズ1例，茶1例，貝1例，エビ1例の計10種であった。複数食餌性抗原は26例にみられ，卵・牛乳アレルギーは14例（14%）にみられた。

食餌アレルギーの発症年令は0才で32.2%，1才で35.6%，2才で16.1%であり3才未満で全体の83.9%が発症していた。

臓器別の症状は0才では皮膚症状の発症が多く，1才

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

〔まとめ〕

喘息サマースクールに参加した延 84 名の喘息児について,田研式親子関係診断テストと Picture Frustration Study を施行し,全体的な心理的特徴と年次的変動について検討した。